



## 一貫コース通信

### 本来の姿を取り戻す事を願って

随分と日が短くなって来た。暑いのが苦手な私には、こころが落ち着きを取り戻す待ちに待った季節を予感させる。また、春から夏まで一足飛びで過ぎて来たが、話題と言えば、コロナウイルス関連のモノが主で、それこそ怒号の勢いで押し寄せた感が強い。そこで思った事は、少しだけ外側に身を置いてみたらと考えた次第である。なぜなら、衰えを知らないコロナ禍だけが私達の日常では無いと思うからである。もし、今般のコロナ問題がなかったなら、どんな日常を過ごしていただろうか。

ヒトは誰でも日照時間が短くなるこの時期、否が応でも感情的になるのではないだろうか。暑さや、それに類する外的刺激が和らぐのに比して、本来の姿が頭を擡げる様に。既に暦は秋であるが、何々の秋に相応しく、感覚は本来の精度を取り戻す。それに呼応し、様々な事象に感応する。その対象がヒトであったりもし、また、芸術で在る事も。私は、それが、人としての当たり前前の証だと思うのだ。

随分前にも類似の混乱が在った。東日本大震災直後、毎日の生活は不安そのものだった。次々に追い打ちを掛ける不安に苛まれ、当時は、本来の自分を見失いかけていたと思うのだ。私が考えたい事は、その経験を如何に生かすかと言う事だ。率直に言えば、混乱期の渦にただただ身を任せるのではなく、自身の主体を失う事を避けなければならない事を。例えば、コロナ禍の現況を口実に、何もかもが出来ない訳ではない。むしろ出来る事の方が多いのだ。その為には、先ずしなければならない事を、整理する事である。そして、しっかり見極める事である。正規の学校生活が行われているので、衣食住は勿論、学習も出来る事だと考える。

そんな中、更なる内容の充実を図るには、今の自分の一步外に立って、見つめる事を進めたい。その一助を綴ろうと思う。私も含め、ヒトは無意識の毎日にどっぷり浸かると、身動きが取れなくなってしまう。また、不安が大きいと撥ね退けられない。そんな時に、例えば文学や芸術(美術・演劇・書道・音楽...)等に触れて見るのも良いと思うのだ。想像するに、人類は過酷な境遇に遭遇した時、人間性を取り戻す手立てとして文学や芸術を生み出して来たのではないだろうか。度々訪れた八方塞がりの状況下で、それを乗り越える力を与えたのは、それを上回る感動なのだと思うのだ。こう言った文化の力の視座を持つ。

所で、先の大きな二つの大戦後、ドイツは見渡す限りの瓦礫と絶望の中に最初に創るモノを自問した。その結果、思い立ったのは主要都市のコンサートホール再建だった。この国はバッハを初め、数々の音楽家を輩出し人類に貢献して来た歴史を持っていたからである。これが復興の始まりだった。本年は、コロナ禍で盛り上りに欠くが、楽聖ベートーベンの生誕 250 周年に当たる。生涯の殆どが恵まれなかった作曲家は、EU の歌の作曲家でもある。私には、気持ちが上向きでない時にこそ、楽聖の曲は大きな力を与えてくれるのだ。

